田村遺跡群
発掘調査

1700年前の住居跡を発見

勾玉、ガラス小玉などの遺物も

県教育委員会がプロジェクトチームをつくり、発掘調査を進めている南国市田村の遺跡群（横手地区）で、約千七百年前の弥生時代後期の竪穴式住居跡が発見され、注目を集めています。

今回発掘されたのは、高知空港の新滑走路となる西北部に位置し、西見当遺跡より約百㍍ほど南、県道より二百㍍ほど西へ入ったところ。

このほど発掘された竪穴住居跡は、直径八㍍を最高に全部で八㍍分、地表から五十～六十㌢掘り下げられた円形状のもので、このうちの二㍍に半月形のベッド状遺構が確認されています。

また、出土した遺物は、勾玉（まがたま）、ガラス小玉、石包丁、石鏃（せきぞく）、台付深鉢形土器やミニチュア土器（小形粗製手捏土器・こがたそせいてづくねどき）などで、特に、勾玉やガラス小玉は弥生人のアクセサリーではないかとして、県下で初めて発見された弥生時代の貴重な遺物。

さらに、勾玉、ガラス小玉、ミニチュア土器は、この時代の人の権威をうらづけるもので、半月形のベッド状遺構と関連が深く、これらは弥生人が祭祀（さいし）に使っていたものと推察され、この住居跡は、集落をまとめる首長のものである可能性が大きい。

このように、遺構、遺物が一ヵ所からまとまった形で出土したのはきわめてめずらしく、県下における弥生時代の生活を知る上で、重要な発見となっています。

弥生時代の竪穴式住居跡

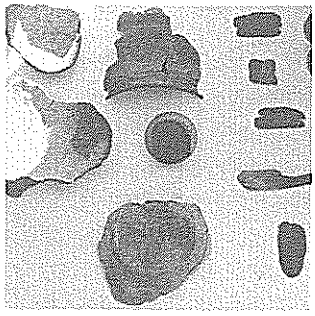
このほか、弥生時代の石製品約五十点、土器片約七千点が発見されるなどの成果があり、これからさらに、貴重なものが発見される可能性ももたれています。

この田村遺跡群の発掘調査は、空港拡張工事との関連から、現在急ピッチで行われており、五十七年度までさらに進められることになっています。

西見当では「石刀」が出土

"南四国の稲作文化発祥地"と言われる田村西見当では、市教育委員会が主体となり、農道改良工事に伴なう緊急発掘調査が行なわれました。十一月下旬より約一ヵ月の発掘調査の結果、三つの環溝の発見、石刀、もみの跡が残る土器など、数多くの貴重な遺物が出土しました。

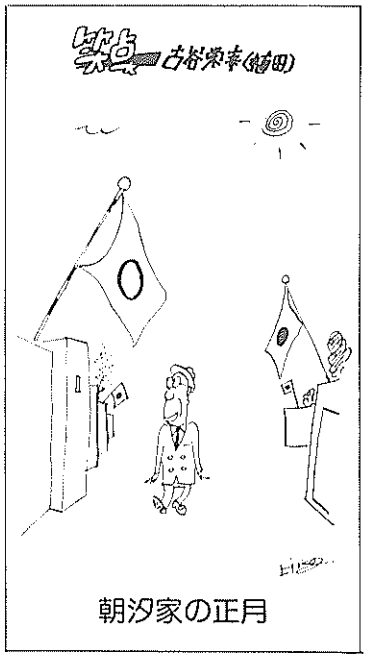
この環溝は孤状溝と推定され、出土品や溝の断面の型などから弥生時代ではあるが、三つの溝には、年代に多少の違いがあるということです。溝がどのような役割を果たしたかは断定できませんが、多分防衛のためではなく排水のために作られたものと思われています。



発見された石刀や土器片

今回の発掘で最も注目すべきものは、弥生前期の遺構から石刀が発見されたことです。そもそも石刀は、縄文時代晩期の磨製石器であり、用途ははっきりしませんが共同体の指導者が呪術的用具として用いたと考えられます。

その石刀が、大陸系の磨製石器とともに発見された例は珍らしく、この意味することは、弥生時代になり稲作文化などの大陸文化が伝って来たが、精神生活においてはなお縄文的な色合いが強く残っていたと言え、とても貴重な発見です。



同和問題講演会

多数の方々の参加を――

とき・2月2日(火)、午後2時～

ところ・社会福祉センター、3階大ホール

講師・寺沢亮一先生（全国同和教育研究協議会事務局次長）

演題・「解放教育の実践と課題」